

第2回幼児体験学習を行いました



10月23日（木）、今年度第2回目の幼児体験学習を実施しました。外部からの参加幼児は9名でした。11月に聴覚障がい者のオリンピック「デフリンピック」が日本で初めて開催されるため、今回の合同保育はデフリンピックをテーマに体を動かす遊びを行いました。

まず、紅白に分かれて親子競技「デカパンリレー」をしました。大きなパンツの片方ずつの足に入り、息を合わせて走りました。途中でバランスを崩すと親子で顔を見合わせて笑う様子が見られました。次に玉入れや鬼ごっこをしました。鬼ごっこではボールがくつつくビブスを着て友達の背中やお腹にねらいを定めてボールを投げました。最初は遠慮がちでしたが、5歳児たちを皮切りに、すばしっこく追い掛け合っていました。

その後は、サッカーやおすもう、ボクシング、ヤカーリングなど各コーナーを回りお気に入りの競技を見つけていました。最後はお母さんからトロフィーを授与してもらいました。さらに、本校教員が過去のデフリンピック大会で獲得したメダルを首に掛け、「TOKYO2025 デフリンピック」の看板の前で記念写真を取るなどして盛り上がりました。

第2回「愛媛難聴児を共に育む会」開催報告

令和7年度第2回「愛媛難聴児を共に育む会」を10月25日（土）にオンラインで開催しました。県内の学校や関係機関から、12名の方の参加がありました。

はじめに、愛媛大学教育学部教授の加藤哲則氏より、講話がありました。講話の中では、子ども一人一人の得意なことや苦手なことを丁寧に把握していくことが本当に必要な支援を考えるうえで重要であるというお話がありました。

その後は、2つのグループに分かれ、各学校・園での指導や支援について、事前に頂いた質問事項をもとに、情報交換を行いました。幼稚園・保育園グループでは子どもとの基本的な関わり方や今月の歌などの音楽の扱い方について、小学校グループでは自己理解・障がい理解や周りの子どもたちの難聴理解についての話題が上がりました。参加された先生方にとって、日ごろの悩みを共有したり情報交換をしたりできる、有意義な時間となりました。

今年度最後の会となりましたが、来年度も引き続き「愛媛難聴児を共に育む会」を開催し、県内の園や学校に在籍する難聴児の支援が充実していくように努めてまいります。



デフリンピックが開催されます！

みんな待ちに待った日本で初めてとなる「東京 2025 デフリンピック」が、11 月 15 日（土）～11 月 26 日（水）に開催されます！どきどき、わくわくしますね！

みなさんもお存じのとおり、デフリンピックは、きこえない・きこえにくいアスリートのための国際スポーツ大会で 4 年に 1 度の開催です。デフリンピックの歴史は、1924 年にパリで第 1 回目が開催され、今年で、ちょうど 100 年目の第 25 回記念大会となります。

今大会は、東京都内や福島県、静岡県を会場に 14 日間開催されます。大会には、世界のおよそ 80 か国の選手約 3000 人が、21 競技でメダルを目指して競い合います。

日本からも多くの競技に私たちと同じきこえない・きこえにくい選手が出場します。みなさんも注目の選手や注目の競技があると思いますので、出場される選手たちに、みなさんの熱い思いが届くよう全力で応援しましょう！

愛媛県から出場される 5 名の選手や監督を紹介します。

- 橋本 樹里 選手（女子バスケットボール）○ 進藤 隆夫 選手（ボウリング）
- 狩野 拓也 選手（男子バレーボール）○ 栗林 愛美 選手（女子バレーボール）
- 佐藤 将光 監督（陸上競技）

本校教諭の佐藤監督、出場選手のみなさんにとって素晴らしい大会となるよう大会の運営や選手へのサポートを頑張ってください！

東京 2025 デフリンピックの競技観戦については、大会ポータルサイトに詳細が掲載されています。競技によっては、YouTube でライブ配信も予定されています。本校ホームページにも、リンクを貼っていますので、ご覧ください。みんなで大会を盛り上げていきましょう！

※デフリンピック選手は、大会競技中、補聴器や人工内耳を外して、全員が公平にきこえない立場になって競技を実施します。大会は、「目」で見て分かる工夫がされています。

リアルタイム音声認識システム『YYProbe』

自動車部品などを製造する株式会社アイシンが開発した、聴覚障がいのある人や外国人の人たちに対し、コミュニケーションの支援を行う音声認識アプリシリーズ「YYProbe」（ワイワイプローブ）＝（ワイワイシステム）というものがあります。これは、主に障がいのある方を対象に、声や音を見える化する独自のアルゴリズムをコアとして、AI 技術を活用して『意思疎通支援』を行うアプリケーションシリーズです。『いつでもどこでも、誰とでも会話ができる』『生活環境を可視化できる』ため、聴覚障がいのある方がコミュニケーションで取り残されないための、安心して暮らせる社会を実現しようと開発されました。すでに累計 190 万もダウンロードがなされ、法人企業のみならず、個人ユーザーによる利用も増えつつあるようです。また、地方自治体のほか、医療・福祉や教育現場においても活用場面が広がっています。聴覚障がいの従業員 300 人とともに共創された、この「YYProbe」（YYSystem）。今年の 11 月 15 日から開催される「東京 2025 デフリンピック」でも活用される見通しのようです。

本校高等部生徒も先日の修学旅行先で、公共機関利用時にアナウンスの聞き取りがどこまでできるのかを試していました。より有効な活用手段などの情報提供にも期待したいところです。

